

「笑い」とは

—— ロジャー・パルバース先生の講演を聴講して ——

小松 亜希子 (平成13年修了)

様々な場面で世の中はリモートやハイブリットでの開催が謳われるようになっていますが、その流れに相反して、平素は完全に会社や現場に参じての業務に従事している私にとって新しい生活スタイルを実感する機会のひとつに、母校との接点の持ち方の変化があります。恩師主催の研究會への参加や、シンポジウムの聴講などを、自宅のリビングでできるようになりました。このたびも、国文学科主催でロジャー・パルバース先生の講演があるとの御案内をいただき、好奇心を刺激されるままに、ほちりとZOOMで拝聴しました。パルバース先生はシドニーから講演をいただけるとのこと。日頃、何かと対面開催を避ける世の中へのモヤモヤを感じたこともありですが、私のような者が世界につないで講演を聴講できるなんて、まさに配信リテラ

シーの向上も悪いことではないな、と改めて思います。お話の中で大変興味深かったのは、「外国での『ジョーク』という括りにはまることがない、人生の説話から紡がれている独特のユーモアを日本人は持っている。その例が俳句や短歌であり、一つの『絵(ピクチャー)』を『説明、解説する(イラストレート)』している」という件りです。大声でゲラゲラ笑う「コメディ」のイメージとは異なる、今までの体験などから「笑い」がふくらみを持ち、「おもしろさ(interesting)」と「つっけいさ(funny)」が融合する日本人独特のセンスがあり、「文化」を内包したものととして「笑い」が成立している。日本人はユーモアのセンスがないのではなく、それぞれの背景を鑑み、経験を積んでいくことで、さまざまな角度から色々な面白さを垣間見

ることができる。具体例を挙げながら、日本人のユーモアのありかたを示してくださいました。

お話を伺いながら、外国籍の知人が何をそんなに面白がっているのかが掴めずに困惑した経験などを思い出し、「笑い」というひとつの概念を取り上げても、人によって国によって違うことを改めて認識しました。また、「個」の部分での自分の笑いの感覚を他者に伝え、また相手の笑いの感覚を理解する技量を身につけることが思いやりにつながり、多様性を受け入れることにつながっていくということにも気づきがありました。

今回、異文化の「ユーモア」を理解するという話題を通して、付随する様々なことに頭を巡らせる機会を得ました。パールバス先生は繊細に日本語、日本の文化を読み解かれていて、なにより日本を好きでいてくださるということが端々に感じられました。私もこれから様々な知識を身につけ、視野をひろげて、のびやかな感覚を持ち続けたいと思います。

(こまつ あきこ・実践女子大学平成十三年修了生)